

# □ 吹奏楽

中橋愛生

2020年が苦難の年であったのは言うまでもない。他の音楽形態と同様、コロナ禍において吹奏楽も多くの活動の制限を余儀なくされた。特に吹奏楽の主たる担い手であるスクール・バンドや市民バンドといったアマチュアの音楽活動は主たる生活圏への感染リスクを避ける意味でも大幅な自粛が行なわれ、3月以降の活動を停止した団体も数多い。スクール・バンド、即ち部活動の活動抑制は新しく管打楽器の演奏を始める子どもの減少、成長の鈍化を意味する。本稿執筆時点（2021年1月初頭）で感染収束の見込みは全く立っておらず、更なる長期化となれば吹奏楽のみならず未来の日本の音楽界全体の人材不足が予測され、由々しき事態である。可能な限り早期の収束が望まれるのは言うまでもないが、同時にこの年に失われた事項について考え、それらが持っていた役割を検討し、活動が再開できたあかつきにはより良い未来が築けるように準備することもまた重要であろう。2018年12月27日に文化庁より発表された「文化部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」が効力を持ちはじめ、部活動の地域活動への移行への動きが見えはじめたときに起きたコロナ禍。吹奏楽の在り方は大きな転換期を迎えている。

## ■1・2月の動き

まずコロナ禍の影響がまだ出ていなかった頃の出来事を記しておく。

大きな話題となったのが、1月27日に全日本吹奏楽連盟が9年あまりにわたって1億5000万円余りを不正に受け取っていたとして事務局長ら2人を懲戒解雇したとの発表。全日本吹奏楽コンクールを主催する日本の吹奏楽の中核を担う団体の不祥事だけに今後の顛末も注目される。

1月1日には毎年アメリカで開催されているローズ・パレードに大学生と社会人で構成された合同バンドである日本選抜グリーンバンドが出演。2月19日には光ヶ丘女子高校（2018年末にシカゴで開催されたミッドウェストクリニクに出演）が高校バンドの国際的な賞である「サドラー・フラッグ・オブ・オナー」を受賞した。プロ吹奏楽団の動きでは1月にはフィルハーモニック・ウインズ大阪が自主レベルによるCD販売を開始し意欲を見せている。1月19日から25日にかけて、陸上自衛隊中央音楽隊の隊長と木管楽器奏者五名がフランスにわたりギャルド・レビュプリケーズ吹奏楽団およびパリ空軍軍楽隊と交流を持っている。1月下旬から2月頭にかけて、カナディアン・プラスが結成50周年記念ツアーで来日した。

## ■中止となったイベントなど

2月26日に政府がイベントの開催自粛を促したことを受け、多くの演奏会が中止となる。まず3月20日に予定されていた全日本アンサンブルコンテストの中止発表が大きな衝撃を呼ぶ。ほか、2年間の休止を経て再開されるはずだった「バンド維新」、記念大会であった「第60回記念3000人の吹奏楽」といった重要なイベントも中止となる。毎年恒例の「響宴」、「ジャパンバンドクリニク」、「高等学校吹奏楽大会（浜松）」、「全日本高等学校吹奏楽大会in横浜」、「出雲ドーム2000人の吹奏楽」など、大きなイベントが年間にわたって中止されている。無論、通常の演奏会も多くが中止された。

特に影響が大きかったのが、夏の吹奏楽コンクールの中止。

まず4月13日に静岡県吹奏楽連盟が独自にコンクール県大会の中止を発表。その後5月10日に全日本吹奏楽連盟が全日本吹奏楽コンクール、小学生バンドフェスティバル、マーチングコンテストの中止を発表した。この最上位大会の中止の報を受け、全都道府県の吹奏楽コンクール（予選）が中止となった。コンクールではなく代替大会を実施した県も西日本を中心にあったが、沖縄のように代替大会開催発表後に更なる中止を余儀なくされたところもある。

中部日本吹奏楽コンクールは滋賀県で録音審査による予選を行なったりしたが、本大会は中止された。

国際的なイベントも、豊中市立文化芸術センターでアジア初開催となるはずだった「国際トロンボーンフェスティバル」が中止となった他、恒例の「浜松国際管楽器アカデミー&フェスティバル」も中止。海外アーティストも「レ・ヴァン・フランセ」などが来日を断念している。

10月7日に海外音楽旅行専門会社エムセック・インターナショナルが倒産したのは、今後の吹奏楽団の遠征に大きな影響を与えるだろう。

## ■コロナ禍の中での活動

その状況下でも演奏活動を行なおうとする動きは出た。5月25日に愛知県吹奏楽連盟が「吹奏楽部の活動再開に向けたガイドライン」を発表。6月22日より日本管打・吹奏楽学会がクラシック音楽公演運営推進協議会とともに「#コロナ下の音楽文化を前に進めるプロジェクト」を発足しヤマハやNHK交響楽団の協力を得て感染リスクを抑えつつ音楽活動を行なうための指針を提言。7月4日にシエナwoが文京シビックホールと共催で「新型コロナウイルス感染症対策検証試演会」を行なっている。その他、管弦楽団や海外の検証結果をもとに対策を行ない、夏頃から演奏活動の再開が見られた。プロ・バンドとしては7月12日にオオサカ・シオンwoが自粛後初のコンサート、11月7日から東京佼成woが創立60周年を記念した国内ツアー。自衛隊バンドは毎年の「自衛隊音楽まつり」を中止し中高生対象に「青少年のための3自衛隊合同コンサート」を開催。10月14日には現代奏造Tokyo（指揮：板倉康明）が日本作曲家協議会の主催で同会員7名の作品を初演。

アマチュアの活動では、10月に中学・高校の実力バンドが集まり「スーパーバンドフェスティバル」の東日本大会（17日／八王子）と西日本大会（25日／福岡）を開催。コンクール全国大会予定日だった10月25日には会場の名古屋国際会議場の主催で「吹奏楽エールコンサート2020」が行なわれ高校5団体が出場しネット中継。11月8日には大阪城ホールで「マーチングバンドフェスティバル2020」が開かれ29校が出演。「管楽合奏コンテスト」は動画配信にて開催され過去最大の応募となった。「全国ポピュラーステージ吹奏楽フェスティバル」（日本吹奏楽普及協会）はフェスティバル形式で実演での開催。株式会社NOIABと毎日新聞社が共催で中高生を対象としYouTubeを使い審査する「学生吹奏楽コンクール・オンライン」を初開催。いずれも主催は吹奏楽連盟ではない機関であるのが興味深い。

こうした活動再開の兆し一方、既に2021年に予定されていた幾つかのイベントは中止が決定、12月に入ると感染拡大が急激となり再び演奏が困難となる。

## ■その他のトピック

4月に名古屋音大が小学四年生から高校生まで（およびその保護者）を対象とし卒業生と教員を加えて吹奏楽団を組織する「めいおん☆ジュニアウインド」を創設したのは新しい試み。6月には吹奏楽教育協会が設立された。12月21日にweb開催されたミッドウェストクリニクにおける第一回バーバラ・ピュルマン作曲コンクール・中学生向け作品部門の第一位を小田実結子が受賞したのは吉報。